

ね　　ぎ

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
さび病	-	やや少	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。(－) (2) 7月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
べと病	-	やや少	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。(－) (2) 7月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
黒斑病・葉枯病	-	やや少	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった。(－) (2) 7月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
ネギコガ	-	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並だった。(±) (2) 7月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)
ネギハモグリバエ	-	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害度ともに平年より低かった。(－) (2) 7月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)
ネギアザミウマ	-	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高かったが、被害度は平年よりやや低かった。(±) (2) 7月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－-)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努める。
- (2) 茎葉散布は散布ムラが生じないように畝の両側から丁寧に行う。
- (3) 発生源となる被害残渣や雑草等を圃場から持ち出して処分する。
- (4) Q o I 剤は、耐性菌の発生リスクが高いため年2回以内の使用とし、使用する場合は連用とならないように注意する。

【べと病】

- (1) 降雨が続くと発生が助長されるので、定期的な防除を行う。
- (2) べと病の病斑には葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）が二次的に感染するため、予防散布に努める。

【さび病、黒斑病、葉枯病】

- (1) 降雨が続くとこれらの病害の発生が助長されるので、定期的な防除を行う。
- (2) 肥料切れすると発病しやすいので、適切な肥培管理に努める。
- (3) 葉枯病（褐色斑点病斑）は、ネギハモグリバエの食害痕上に二次的に感染している事例が確認されているため、栽培期間を通してネギハモグリバエの防除を徹底する（R 2-2病害虫防除技術情報参照）。

### 【ネギコガ】

(1) 有効積算温度から推定される第3世代の防除適期は、県中南部で平年並の7月第2半旬である。

### 【ネギハモグリバエ】

(1) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努め、被害が確認された場合は薬剤散布を行う（図1）。

### 【ネギアザミウマ】

(1) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努める（図2）。

(2) 高温条件下では世代の経過が早いため（25℃では16～17日程度で1世代経過）、散布間隔が空かないよう注意する。

(3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤でローテーション散布を行う。



図1 ネギハモグリバエによる食害痕



図2 ネギアザミウマによる被害